

《翻 訳》

「独逸協会学校」教師としてのゲオルク・
ミヒャエリス（2・完）

——『国家と国民のために』より——

堅 田 剛（訳）

社会と宗教における革新の試み（原書110～113頁）

性急で強引な革新の危険は、政治的、文化的、経済的生活のあらゆる領域に存在した。ドイツ人の医者や食糧専門家の助けを借りて大いに熱心に取り組まれたのは、国民食の問題であった。日本人の栄養は、支配的な見解によれば、偏っており不十分なものであった。それは主として菜食中心のものであったが、沿岸部においてだけは魚やその他の海産物を摂って比較的豊かであった。とりわけ年少者に救いようもない死をもたらす「ベリベリ」(Beriberi) 病⁽³⁰⁾の頻発は、偏った不十分な栄養の帰結するところであった。もとよりあらゆる種類の寄宿舍、たとえば兵舎、幼年学校、貴族学校、刑務所において、異なった食事による抜本的な対策がなされた。ある寄宿舍では従来どおりの新鮮な野菜中心に、他の寄宿舍では肉の割当を増やして、第三の寄宿舍では野菜と肉からなる食事というふうに、年齢やその他の生活様式に応じて配分しつつ、給食がなされた。毎日測定されたり検査されたりして、最終の数値が比較と統計を用いて確定された。こうして全体的な結果が、国民的な食糧政策として決定されるはずであった。もちろんこの計画は、大方のところでは単なる理論の域を出なかった。というのも、健康上必要と証明された食事の転換が、農業および畜産業の総転換を前提とするからで、国民生活および経済生活の全体に切り込む処置を実行するには、大方のところで前提が欠けていたからである⁽³¹⁾。

ところが、食糧という外面的な領域において結局は理解され承認されえたことが、最も内面的な領域においても試みられた。つまり、宗教の領域において

である。まさに近代の標準的な社会こそ、最も冷静な折衷主義の立場においてさえ、次のような問題を抱えている。すなわち、いかなる宗教が最も国民のためになるのか、いかなる宗教が、たとえば子供を教育する際に、基礎とされねばならないのか、という問題である。当時は真面目に考えられていたのだが、閉鎖的な教育施設において、ある施設ではキリスト教の教義にしたがって、可能なら宗派の違いも考慮しつつ、児童を教育させ、他の施設では仏教の教えや孔子の道徳にしたがって教育させる。さらにその成果、つまり生徒の倫理的ならびに学力的な成績をみたらうで、いかなる信条が讃美に値するかについての決定をくだす。こうして可能ならば、古い宗教から最善のものを取り出して新しい国民宗教を構築する、というのである。

だが宗教の領域における革新に対しては、まことに強力な、つまり究極のところを押さえた反対論が顕著になった。日本の皇帝が憲法を發布し、東京の新宮殿の玉座の間で帝国の大臣たちや外国の代表者たちに取り巻かれながら、国民に近代的な基本権を与えたまさにその日に、祝典の挙行を前にして、ある大きな騒動が生じたのである。人々は文部大臣の森〔有礼〕伯爵が到着するのを待っていたが、彼は日本のあらゆる習俗に異議を唱えてのゆえか、時間どおりにやって来なかった。祝典はとうとう彼を抜きにして行われたのだが、彼の欠席の理由について当面は口外しないことになった。まさに彼が宮殿に参内しようとして、祝典用の礼服を着して再び書斎に入ったとき、二人の男が強引に彼に面会を求めてきた。彼らは、面会がかなわないことを知らされた。彼らは、大臣のお命に関わることです、と応じたので、それで大臣は彼らに応接することに決めた。彼らが入ってきたとき、大臣の傍らにはなお一人の官吏がいたが、彼らは官吏の退出を願った。申すべきことについては大臣お一人にしか申せません、と言うのである。大臣が官吏を去らせたので、三人だけになった途端に、男たちはキモノ (Kimono) から短刀を取り出して、大臣を刺し殺した。その理由は狂信主義的なものであって、森が宗教の領域における革新思想の持ち主であったことによるものだった⁽³²⁾。

宗教の領域においては、私が前に日本での難問について述べたことが、かなりの程度で当てはまる。すなわち、根拠づけたり現実的なことがらを知ること

の難問である。J・J・ライン教授は、当時よく読まれた日本論である『日本見聞記』(Japan nach Reisen und Studien)の中で、「日本人の学者や神官や通訳に尋ねてみると」と述べている。「我々はいつも望むことが覆され、望まないことも叶えられないことに気づくだろう。怠惰と無知が一方にあり、不可解な神秘が他方にある」と。シュピンナー*は、私が東京に滞在していた当時、ドイツ福音派教区の宣教師兼牧師であり、神官や学生と生活面でも精神面でも交流していた人物だが、彼のような深遠な探求者でさえも、確定的で、彼自身をまがりなりにも満足させるような成果や結論には、まるで到達できなかった。彼はザクセン・ワイマル大公国の宗務総監督兼教区最高顧問として、数年前に亡くなったが、亡くなる前にもう一度当地に彼を訪ねたとき、彼は私に以下の体験談を物語ってくれた。すなわち、シュピンナーのもとには、キリスト教の本質について教えてもらおうと、日本人の学生たちが好んでやって来た。彼らのうちの多くの者は、内面的にも福音に圧倒されて洗礼を受けた。他の者は打算があってやって来た。シュピンナーはたまたま気づいたのだが、キリスト教的な諸概念に彼らは意外にも習熟していた。そこで彼が、貴方たちはその知識をどこで得たのか、と尋ねてみると、次のようなことが判明した。たとえば、ある学生は、はじめはフランス人のイエズス会士たちのもとにいて、彼らから教わり、洗礼を受け、ついでにフランス語を習った。彼は次に鞍替えしてアメリカ人のメソヂスト派の伝道師のところに行って、その家族の中で生活し、もう一度洗礼を受け、英語を学ぶ機会を得た。彼は今度はシュピンナーのもとで、ぜひとも実践的な宗教研究を継続したい、というのである。もちろんシュピンナーは、この学生を追い出したにちがいないのだが。

***Spinner.** 1885年、日本における普遍福音・プロテスタント宣教会の主席宣教師。東京と横浜のドイツ福音教区の牧師。のちワイマルの宮廷付き主任牧師。

神道、仏教、儒教、キリスト教（原書113～115頁）

日本人ははたして神道信者なのか、仏教徒なのか、孔子や孟子の信奉者なのかといった、あとに続くべき難問は、以下のことと関連している。すなわち、神道という原初的な民俗宗教は、のちにやって来た異教に、つまり中国の孔子（Konfuzius）の哲学やインドの仏教に取って代わられることはなかった。ゲルマンの神々の教えがキリストの福音に取って代わられたのとはちがって、日本民族は新しい教えを、維新の時代に西洋の文明を受容したのと同じ熱心さでもって受容したのである。ただし、昔も今も、新しい教えがこの民族に深く浸透することはなかったのであるが。儒教も仏教も神道に順応したので、個々の日本人も日本の国政も、この宗教的ないしは習俗的な混合物から、彼らが目的に合ったりご利益があるとみなしたものを取り出すことができたのである。

神道とは、自然崇拜と祖先祭祀である。自然崇拜の対象としての天と地、太陽と月、火と水が、太祖の創造の物語と内面的に結びつけられて同一化している。また神道はカミ（Kami）の教えであり、有名な領主や勇士や学者を神または霊として神的に尊崇するのである。

孔子の哲学はここに関わることはできた。その倫理は次の問いに極まる。すなわち、「高潔かつ幸福であるためには、人は公民として、また同胞に対して、いかに振る舞わねばならないか」という問いである。親への孝が最高の義務ないし美德であり、それは死を超えて継続する。親は死後も敬愛の対象なのである。だが儒教の信奉者は忠実な臣下でもあり、領主は神的な原点であり神的な目標である。領主に対しても死後に祈りが捧げられる。彼は冥界から働きかけるのである。年長者は我々の暦であるという教え——孔子はキリストより6世紀前に生きた——が形成したのは、以下のことである。「日本のサムライ（Samurai）の処世訓全般にみえる福音もしくは神髄であるが、それらはサムライの教育の基礎であり、名誉と義務の概念を形成する際の理想像であったようだ。それらは日本の封建制度を支える政治的倫理となった」（ライン、519頁）。

仏教も紀元後6世紀の中葉に日本に到来したとき、神道に順応した。仏教は、社会的領域ではカースト制度を軽視し、道徳的關係ではあらゆる世俗の財産は空虚で儚いものであるとの教え、つまり輪廻の結果、最終的には涅槃で救済されるという教えをもたらしした。

輪廻という仏教の教えの最後の部分は、日本にとっても最も重要なものである。冥界の裁判官であるエンマ・サマ (Emma-sama) によって、死者の魂は最終審判を受け、俗界に送り返される。そこでは魂は功德あるいは罪責にしたがって、より完全な人間またはより高次の存在の姿になって再生するか、あるいは動物になって再生するのである。「奴隷として苦勞した者は王子として再生し、王として統治した者は蘇りの際におそらくは浮浪者に成り果てる。何人も己自身を監獄にになってしまう。己の振る舞いが自身に喜びや苦しみをもたらす。仏教徒は誰でも涅槃への途上にある。この途が短くされるか、それとも苦勞の多い茨だらけのものになるかは、もっぱら自分次第である。自制、悪の回避、善なる所行、清純な思考といったものが、脱世間的な隱遁に向かって、遍歴を促すのである。ブッダ自身のみは、死に直接に辿り着いた。だが彼は、すでに前もって550回の遍歴を達成しているのである。」

こうした教えを信ずることは、徳の高い生き方へと促す強い推進力を確実に含むことになる。従順な仏教徒は、親を大切にし、臣下としては従順で感謝の念をもち、適度に幸福であり、不幸に耐え、生活のあらゆる局面で魂の安らぎを保つのである。この魂の安らぎ、つまり喜びと苦しみによる興奮からの解放もしくは解脱のなかに、日本人が希求する完全なる状態が存在する。このような理想は、日本の芸術家がブッダの肖像を作成する際の特徴のうちに現れている。最も有名なブッダの座像は、横浜近くの鎌倉にある大仏（大きいブッダ）だが、これは16メートル以上の高さがあり、金属の重さにして450トンもある、驚くべき銅像である。神的な安らぎのうちに、眼をほとんど完全に閉じたまま、大仏が座っている。そこは杉の大木に囲まれた野外の広場であるが、海風が杉の木をあちこちに動かして、ギーギーと歌っている。像の前では、信者が日光に暖められた砂の上に座りこんで、何時間ものあいだブッダの安らかなお顔に見入ったり、木々がざわめき歌うのを聴いては、冥界を予感し、目覚め

たまの眠りを予感し、苦しみや放埒な喜びからの解放を予感している。

日本人の宗教観（原書115～117頁）

我々は今や次のことを理解するであろう。すなわち、貴方は神道と儒教と仏教のいずれの信奉者かという問いについて、日本のある学生から明解な答えを得ることは困難であった。彼は諸々の宗教的・哲学的な見解からまろごと影響を受けているのだが、それはあたかも、そうした諸々の見解が彼の民族のなかで何千年もかかって発展してきたかのようにであった。神道にせよ孔子にせよ仏陀にせよ、固有の宗教が問題ではないのである。神道で唯一具体的なのは洗練された儀式しかなく、儒教では人格的および政治的な倫理しかない。また仏教でも神の教えなどはなく、人間や観念の神格化しかない。

したがって、私が神や神的な事象について一緒に語り合おうとした学生たちにおいては、冷やかな懷疑が支配的な感覚であった。彼らは、問題に直面するや覚めた値踏みをはじめた。キリスト教に対しても、彼らはこのように冷たく静観する態度をとった。名前だけのキリスト教徒のなかに、真の信者は数少ない。ドイツ人の場合もそうではあるが。真の信者なら彼らの不信心を、つまり個人的なキリスト教信仰の立場を超越した彼らの世界観を、意識的に強調するものなのだが。ドイツに行ったことがある日本人でも、倫理的にいかがわしい状態をとまなう大都市での生活しか知らないのが通例だが、そうした日本人が故国に帰ってキリスト教の生活状況や文化状況について報告したことがらは、福音を宣伝するなんの力ももつことができなかった。その結果として、多数の小さな宣教会は、とりわけ、相互に対立し改宗者を離反させようとするアメリカ風の名前の宣教会は、信奉者を兄弟として一括する宗教、という非難を抑圧することになった。

こうしてつねに存在するのは個々人であり、つまり自覚的な信仰へといたる、まったく個人的な求道や苦闘を踏まえた個々人なのである。彼らのうちの一人が、当時の司法省政務次官、三好〔退蔵〕であった。彼は私の近所に住んでいたのだが、私の書斎でゲルラッハの聖書解説を見出した。これは私の母

が、送別に際して贈ってくれたものだった。彼が私にそれを貸してくれるよう頼んだので、私は喜んでそうした。三か月後によく彼はそれを返してくれたのだが、すっかりボロボロになるまで読み込まれたうえに、雨で濡れてしまっていた。彼は裁判所と刑務所を査察するべく、人力車で全国をまわる長期の公務出張のあいだもそれを持って行き、車に座って、雨のときも晴れのときも読んだのであった。彼はその後シュピンナーに、彼とその家族に洗礼を授けてくれるよう頼んだ。

そのような個別的な人間性から出発して、萌芽的な発展においてではあるが、キリスト教的生活が日本でも自覚的に繁栄することとなった。日本は日本人によってのみ、キリスト教に味方することができるだろう。外国人の宣教師に対しては、この国民はその深い宗教哲学によって、つまりその強力な倫理的教えによって、ほとんど克服しがたいようにみえるほどの、強い不信感をつねに抱くことだろう。言葉や生活習慣や社会的関係において彼らに無条件に適応し、布教者であろうなどと望むこともなく、彼らと一緒に神の前では平等であろうと試み、彼らと兄弟であると自覚できるキリスト教徒のみが、彼らによって受容され是認されることであろう。

日本人が感じているのは、キリスト教は古来の土着の教えには接ぎ木しうるが、神道や仏教には併合されえない、ということだ。彼らは本能的に次のことを感じている。すなわち、ここで肝心なのは、暗殺された森伯爵が推し進めようとしたような宗教政策ではない、ということである。キリスト教を国家宗教に格上げしようとするれば、きわめて恐ろしい転覆や破壊が引き起こされることであろう。肝心なのは、個々人によるキリスト教の宣伝と、独自の教区が最初の小教区から形成されることのみである。最初の小教区が現実的にキリスト教的生活の場所になったとき、ようやくにしてそれらは他の教区にとっての光として作用しうるのであるから。日本人にはなにごともしつづけることはできないし、強要することもできない。私たちは、日本人のほとんど内気で控えめな本質を、ただしその裏には強い自己意識が隠れていることを、よく理解しなければならない。日本人のキリスト教的な生活が成長する肥沃土を、私たちが知っているかぎりにおいて。

国民性と言語(原書117~119頁)

このような認識をもって、先に進むこととしよう——私が提示する望みとは、本書で私の日本での経験を捧げる節がこうした出来事を示すことであるのだが——それは、日本の歴史や、その地理的形状や、地学的ないしは山岳誌的な諸関係が、住民に与えるはずの影響を解明しようとする際になされるのである。

この島国は、70年前までは外国から完全に閉ざされており、国境を開放するや、それぞれの仕方でこの国に利益を求めるべく、外国人が殺到した。この島国の住民は、諸外国の代理人たちがどこにでも押し寄せてくるなかで窮地に追い込まれることを望まないならば、当然ながら強い抑制を、つまり用心深く静観する態度を身につけるにちがいない。そこで私は、外国人との会話にみられる日本人のためらいがちで用心深い態度について、思うところを述べてみる。日本人は、けっして直接で性急な回答を提示することはないし、同様に、けっして直接に質問を持ち出してくることもない。私は間もなく次のことに気づいた。すなわち、日本人が私のところにやって来て、なんらかの重要な情報を求めたり、私の説明を必要としたり、認容を得ようとする場合、彼らはけっして用件そのものを持ち出してくることなく、いつでも最初は適当な別のことがらについての用心深く見当をつける会話から始めた。彼らはこうした会話から、実におもむろに訪問の本来の目的へといたるのであった。同様にして次のことにも慣れなければならなかった。すなわち、日本人は誰かが表明した職務上の要求について、けっしてただちに説明に移ることをしなかった。私が要求を表明した場合でも、副次的な目的をねらっていないかを裏側から確認できるまでは、彼らはつねに決定を延ばそうとした。こうした駆け引きは、最初は非常にもどかしく思われるもので、日本人の誠実さについて大きな疑いの念を引き起こしかねなかった。だが私は数年のうちに、この注意深い掛け合いの独特の理由を見分けて、もどかしく思うべきでないことを学んだ。見分けたり解釈するのがむずかしい回答からも、とりわけこの回答が慇懃な拒絶を表していると

解釈できる場合には、適切なことがらをはっきりと聞き取ることを学んだのである。あたかも、プロイセンの官吏が明晰で、ことによると厳密な形式でもって、特定の指令を伝えてきたかのようにして。

日本人の言葉は、それ自体が学習であった。私は教養層の文字や話し言葉について述べているのではない。これらの学習のためには、4年という時間では足りなかった。書き言葉は周知のように中国のものと同じであり、概念ごとに一つの文字つまり字形を有する象形文字である。教養ある人々つまり知識人は、1万から2万、あるいはそれ以上の漢字を知っている。これに挑戦してみようというのは、特別に文字の才能をもっている外国人、とりわけいづれ翻訳者になろうと思う人々だけであった。私たちは大衆の話し言葉を習得することで満足し、やがて、一人で買い物をしたり、旅館に泊まったり、旅行したり、職人たちと交際したり、使用人たちに指図できるまでになった。だがこうした言語技術上の困難さについて、私はこれ以上詳しく語ろうとは思わない。ここで我々に関心があるのは、日本文字の言語における、そして言語による表現のほうである。言語形式と言語内容において、日本人は、その礼儀や恭順や同情を表現する。そしてここでも再び示されるのは、驚くべき態度変更であり、それは、私たちは日本人のなかでも、とりわけ不正直な人々を相手にしてしまった、と考えざるをえないようなものである。

私の学生たちは、講義に出られなかったときは、書面で弁解せねばならなかった。この弁解には、だいたい三つの決まり文句がみられた。一つは次のように書いてある。学生が来られなかったのは、スコシ・ビオキ (skoshi bioki) つまり少々具合が悪かったからです、というのである。第二のものはこう来る。トモダチ (tomodachi) (友人) が来ました。第三のものは、いうなればきわめて厳粛なものだった。オバーサン (obasan)、つまり祖母が亡くなりました、というのである。最初は、老婦人が亡くなったことを実際に信じて、私はお悔やみを述べた。ところが、同じ学生について同じ学期に第二の祖母が亡くなったばかりでなく、それはそれであり得ることとしても、さすがに同様のことが3回も4回も起こるとなれば、これは奇妙なことであった。このことでもちろん私は激しく腹を立て、図太い不誠実のゆえと信じた。だがのちに、私は

次のようなことを学んだのだ。すなわち、これらすべての弁解は、慰謝の形式をこそ意味しているのであって、祖母が亡くなったということによって、それは最高に慰謝なものになったのである。たとえば、例の学生はこう言いたかったのだ。「先生の講義は僕には本当に重要なものですので、僕がそれに出ないことを許されるのは、たとえば近い身内が亡くなったときに限られるほどののです」。出席できなかった本当の理由を私に伝えることを、彼はまったくもって義務とはみなしていないのである。こうして私たちは、次のことを想起せねばならない。すなわち、私たちは社会的な嘘を広範にわたって知っており、たいいていの人々はそれに良心の呵責を感じ取ることはないのだが、けれども不誠実な社会的弁明を用いるからといって、それを嘘と呼ぶことに対しては、激しく抵抗することであるだろう。

地震、台風、火災（原書120～124頁）

日本国民の上には、その生活を乱したり危うくし、しばしば破滅的な仕方ですその運命に介入する、三つの災厄が絶えず漂っている。第一に地震、第二に台風、第三に火災である。日本の格言にこういうのがある。生まれた家で死ぬ者は少ない。この意味は、地面とその上にあるものはグラグラしているので、持続性を信じることはできない、というものである。日本に住んでいた4年のあいだで、私は大規模でものすごい地震を経験することはなかったが、中規模や小規模の地震の数はとても多かった。たとえば、1888年に地震観測所で88回の地震が記録されたことを、私は書き留めておいた。当時の最も激しいものは、次のような仕方で見えた。すなわち、我々のヨーロッパ式に建てられた住居の煙突は、屋根から崩れて庭に転げ落ち、日本の湿度のために傾斜を付けて壁に掛けていた絵画は壁にぶつかり、きちんと積まれていなかった品物は、戸棚や置き台から落下してきた。初めのうちは、地震に対してどうということもなかった。それはなにか新しいもの、面白いもので、生活上の変わった経験にさらに地震のそれが付け加えられるという、ある種の誇りさえ感じさせた。だが徐々に敏感になり、年ごとに神経質になってきた。地震が来ても、事態がどの

ように終息するのかまったくわからない。歴史的に確かな文書によれば、近年地震が暴れて、全村落を呑み込んでしまったとか、山腹を抉ってしまったとか、あげくは、熱い溶岩流が静かな谷間を覆ってしまったという。私が出国した1年後に、長いあいだ完全に死んだものと信じられていた火山のバンダイサン(Bandaisan, 磐梯山)で、同じような大規模の噴火と地震が起きた。地震の際に、破裂したボイラーのように山腹が裂けて、広範な居住地が消滅してしまった。

日本人にふさわしい良い教育として、地震の際に動揺を示さずまったき平静を保つ、ということがある。私も当然ながら、講義の最中に地震がやって来て、窓の鎧戸が盛んにガタガタし始めても、まったき平静を身につけて、眉一つ動かさなかったものである。こうした出来事から得られた唯一の記憶とは、次のようなものであった。すなわち、最初に揺れに気づいた学生が前方に向かって小声で「ジシン(jishin,地震)だ」と言い、次いで他の者たちが確認しながら頷くという、それだけのものであった。あとは、なにごともしなかったかのようになり、講義が続行された。

日本人がとりわけ用心深く不可解な交際家であるとしても、不思議ではないだろう。若いときからずっと、行儀のなかで身を処し内面的動揺を隠すように教育されてきた者は、自分の見解や目標を不注意にも性急に告知することを警戒して、注意深くて賢く見守る交渉人となり、けっして早まって手の内を見せることはないのである。

地震とともに、台風も住民にとっての脅威である。台風は日本人の空想のなかで大きな役割を果たしており、絵画や工芸品において、しばしばつむじ風のモチーフが表現される。それはたいていは龍の姿をとっているのだが、龍こそは、その強力なうねりによって空を飛んだり海を泳いだりしながら、自然の猛威を喚起するのである。台風は地震ほどしばしば現れるわけではない。台風は定まった進路を進み、中心部が都市や農村の上空を通過するときには、大きな破壊をもたらす。もちろん周縁部に多く接触した地域は多かれ少なかれ強い暴風を被るが、本来の破壊力は徐々に押し進んできた嵐の中心部に存在するのである。台風観測の分野において、ドイツの気象学者E・クニッピングは、格別

に有益で祝福すべき存在であった。彼はこの島国の全域に気象観測所を配置して、電信によって東京の本部と連絡できるようにした。その結果、台風観測の任務は申し分なく機能し、台風が通過する各地方では、とりわけ沿岸部の都市では、適時に警戒することが可能になった。こうして小さな沿岸用船舶は警報信号によって呼び戻され、家屋の火を扱う場所では火が消され、危険にさらされた家財は安全なところに移され、このような仕方では何百人もの人々と何百万もの財産が消滅を免れたのである。

私はあるときクニッピングを彼の観測所に訪ねたのだが、彼に会って、接近しつつある台風の情報という接待を受けた。それは今までも通った進路に沿って、おそらくは直接に東京に襲来するはずだ、というのである。暴風進路の方向にあたるあらゆるところへ、彼は電信で警報を送った。東京はまだ静かであったが、台風模様であり、蒸し暑く、太陽も隠れていた。暴風の中心点が我々に襲いかかる速度がとりわけ速いものであったので、クニッピングは私に対してただちにこう言った。「今からでも無事に家に帰りたいのなら、すぐに走り出さない」。私は半時間ばかり馬で走らねばならなかったが、すでに馬を下りるところには最初の一撃が始まっており、街角では麦わらや紙が舞い上がって、回転運動に巻き込まれては上方に吸い上げられており、砂塵が全市を覆っていた。私はやっとのことで馬を馬小屋に引き入れ、家に逃げ込むことができた。やがて暴風が襲ってきた。主勢力が頭上を通過するまでに1時間ほどかかり、2時間ほどのちには、庭木のうち何本がなおも立っているか、建物の損傷が何であるかを、外に出て目撃することができた。

台風につきものの同伴者は火災である。どこでもというわけではないが、火事が潜在しているからである。暴風が家に吹き込むと、火花を畳にまき散らし、すごい速さで火が燃え上がり、木と紙でできた家屋の仕切りを燃料としてしまう。たとえ暴風が吹きつけなくても、日本の都市では火災はほとんど日常的な現象である。東京は当時百十万の住民を擁していたが、ほとんど毎晩どこかの市域で火事があった。私が住んでいる丘の近くには、消防署があった。その鐘が1回だけ鳴って長い休止があると、それは火事になったのは遠く離れた市域であることを意味するので、誰も寢床から起きあがらなかった。鐘が2

回打たれると、火事は近いということであるから、打ち方の切迫性や火事場からの風向きによって、人々は対策を立てた。だが鐘が3回打たれて、しかも短い間隔であって、ついには連続した音になると、人々は危険地帯の真ん中にいるということであった。ヘーリングと私の家は一続きの丘の上にあり、樹木と数に取り囲まれていたので、危険は少なかった。当然ながら、私たちは火事が近いときには起きあがって、屋根を火の粉の雨から守ったり、いうなれば夜の侵入者たちを見張ったりした。彼らは私たちの丘から火事を見たがるのだが、もちろん、家の設備を傷つけたりなにかの物品をくすねたりする機会を利用することもあったからである。

火事を最小の空間で消しとめることに成功しなかった場合は、火事は東京の狭い道路を介してつねに大きく広がることになり、全市域を危険にさらすことになる。私が体験した火事は、3千から4千軒の家が一晩で焼失するというものだった。たしかに消防隊、つまり自由意志にもとづき、高い犠牲を払った、決死の団はいるのだが、彼らの仕事は本質的には次のことに尽きる。すなわち、彼らは風向きや炎の強さに応じて、火事に進路を任せるべく境界を設定するにすぎず、そうしてこの境界にある家々を破壊したり自然の阻止線を利用したりして、路上非難のために道を設けるにすぎない。そうして彼らは、その向こう側の避難路を自然の猛威の飛び火から守るのである。これは彼らの名誉に関わる点なのだが、彼らはこの境界を広めに引くことはしない。彼らがそれ以上の家々を守ろうとすれば、まさに最後の数分間にあえて破壊に奉仕したということで、大きな金額が請求されるであろうからだ。だが彼らが間違っ、境界を狭く定めすぎて守るべき区画を維持しえないと、それでも彼らは屋根の上に残って、消失する家ともども落下することになる。そのような火災に備えて、四つ辻ごとにそれぞれ石を積み重ねた耐火性の安全蔵があるが、これは高価な家財のために建てられて維持されているものである。その他すべてのものは短時間のうちに崩れ落ちてしまうので、毎年国民が失う財産の価値は途方もなく大きなものになる。火災保険も、このように危険にさらされた物件に対しては形なしであるだろう。

まさにこの危険な自然に対して、実に日本の大衆は軽薄さと隣り合わせの無

頓着さと平静さをもって振る舞う。冬に彼らの家庭を見て、よく火事にならないものだと本当にびっくりするにちがいない。彼らは頑丈で掛け金付きの暖炉を有しておらず、部屋が寒いときには、大きくて灰で一杯の木箱⁽³³⁾を持ち込んで、その中に上から赤く燃えた木炭を積み重ねる。炭の上には濾過器に似た円い金属製の壺⁽³⁴⁾が乗っており、これから暖がとられるのだが、残念なことに木炭の燃える火からガスも発生する。失神という重大な危険に身をさらすことなしに、毎晩そのような火の傍らで寝ることはできない。さらには火鉢が運び込まれて、人々は覆いの下に這いつくばる。日中も家族全員がこの「ヒバチ」(hibatschi)の周りに座ったり、囲炉裏や金属製の壺の上に布団を被せ、その下に部屋の同居人全員がうずくまって、手や足を暖めるのである。こうして彼らは何時間も座っているが、それでもけっして飽きることがない。日本人は、絶望するほどに何もせずに、待ち時間をつぶす才能をもっている。すなわち、使用人や勤め人にいつもどおりの仕事を期待する場合であるが、それは我々のドイツにおけるのと同様である。

日本人の労働（原書125頁）

私たちの観測するところによれば、日本人は必要がなければ、たしかにそれほど長く働くことはない。芸術家、たとえばなんらかの一連の絵画の模写を委託された画家は、彼の仕事の割当分を通常は期限を守って納品し、割当分の謝礼を請求して受領するけれども、金を使い果たすまでは、再び働き出すことはないのである。それは芸術家にかぎらず、職人も、人力車を生業とする車夫も、賃労働者も、通常は何日かしか働かず、休みを作って楽しもうとする。さらに特徴的なことに、日本人は週末を休日とする7日間の週暦を持たずに、5日間からなる暦を用いて、通例として5日目に休みをとるのである。しかし農村の労働者は勤勉である。仕事が集中するときには、彼は毎日の激しい作業なしに済ませるわけにはいかない。農民はまったくもってモンゴルの系統や中国人と同族であり、中国人は一般に、少なくとも職人の場合には、日本人より勤勉で力量がある。日本人の念頭にあるのは、労働の報酬は生の享受である、と

いうことだ。だが日本人も、こと外国においては、生涯の最後に楽しもうと、労働力の限界にいたるまで働くのである。

シカタ・カナイ (原書125～127頁)

日本人は無欲であり、もとよりこのことが労働を阻害している。さらに、遭遇する危険や損害に対する無頓着さが加わる。そもそも日本人は、力強く火事の危険に肉迫する一方で、注意深く火を扱い、彼らの家屋を火事に耐えられるように造る、と思うだろう。ちょうど日本にいるヨーロッパ人が、地震の危険にもかかわらず、そうするように。だが日本人は、こうした危険をあっけないほど落ち着いて、なるがままに受け入れる。そして損害や損失が生じて、平然として避けられないことに慣れ親しむのである⁽³⁵⁾。日本人は自分の家屋のまだ燃えている最後の角材に煙管を付けて、シカタ・カナイ (shikata kanei, 仕方がない) とつぶやく。およその意味はこうである。「違うようにはなりえない」。このシカタ・カナイという言葉は、日本語の語彙のうちで特徴的なものの一つであり、国民の特性を表している。美徳もしくは重要な倫理的負荷がそこには含まれている。それは禁欲的に天命に慣れ親しむことではあるのだが、また介入したり改善したりする責任を無関心に見逃してしまったり、曖昧に免れることでもあるのだ。高価な花瓶が割られたり、学生が試験で落とされたり、愛する子供が死んでも、いつも「シカタ・カナイ」である。我々この言葉を使う癖が付いてしまい、初めは冗談で使い、次には日本人、とりわけ我々の家事使用人たちの不注意に対して、あきらめて肩をすくめながら使ったが、ついには我々のうちの何人かまでもが、小さくない危険に出会いながらも、そのようなシカタ・カナイ人々になってしまった。

さしあたっては、日本人は大きな危険に出会っても生活しつづけているわけで、自分たちの生活が平和なあいだは、ドイツにおいてよりもはるかに感謝をしながら楽しんでいる。日本人は大きな人生の喜びをもっている。彼らは人生の芸術家である。最少の手段でもって、またほとんどいつも自然つまり季節に依存しながら、家族や友人に囲まれて、彼らはまったく純粋で無邪気な喜びを

工夫する。春には桜の花が咲き、そこには有名な並木道があり、多くの家族が群れをなしてそぞろ歩く。店の者たちが桜の下に床几を置き蓆を敷くのだが、家族ごとに座ったり寝ころんだりしながら、蜂がブンブン飛んでいる桜の花の淡紅色の海越しに、すばらしく青い向こうの空を皆で観賞する。それから彼らはお茶を飲み、ご飯を食べ、小さな煙管で煙草を吸う。それ以上のものを彼らは必要としないのである。裕福な人々は、家の庭になんらかの名品を植えようとする。例えば藤であるが、棚を巡らせて家を囲んでしまったりする。あるいは彼らは、すばらしい菖蒲や蓮を小さな池に植えて花を満開に咲かせたり、彼らのお気に入りの菊 (Aster, Chrysanthemum) をまったく奇妙な変種や形態の低木や花にするまで改良したりする。そうして彼らは菊祭りや花菖蒲の夕べなどに招待し、庭を絵のように飾り立てる。彼らは、こうした自然の喜びに参加することに優る喜びを知らないのである。したがって、どの家からも国の聖なる山である富士山 (Fujiyama) を眺めることができると、そこは富士見町 (Fuyi-micho)⁽³⁶⁾ となるのであり、すなわち、すべての家が富士山を眺めることができる部屋をもっていることになる。また、夏に霧に覆われていたあとで、秋になってその聖なる山が銀色の頂とともに最初に姿を現した日は、通常、喜びの日もしくは祝いの日となる。

しかしながら、こうしたすべての喜びがひとたび突然の終わりを迎えても、すなわち、富士見町が焼き払われたり、台風が庭を壊したり、コレラが国中にはびこって家族の一員を奪い去ったりして、こうして生活がまったく壊れたようにみえても、日本人はそれを禁欲的に落ち着いて我慢するのである。——シカタ・カナイ。

日本人の法律学習 (原書127～130頁)

本書の余白は、日本の土地や人々についてこれ以上詳しく書くには狭すぎる。我々は、読者に何か人間の本質についてや、私が4年間その中に入り込んでいた諸々の関係について物語る、すなわち、実際の見聞に由来するがゆえに価値のある光景を紹介するべき地点にやって来た。私のもとを、天分豊かな若

い日本人たちとの4年間が過ぎ去った。彼らは私の学生であった。我々の時代には、最初の学年の始めに12名、次の学年に20名、そして最終的には約50名が独逸協会学校(Doitsu Kiokai Gakko)から公的な生活へ、たいていは公務へと進んでいった。私は独逸学校(Deutsche Schule)の法科に勤務していた。最初の年は一人きりであった。日本人は、まさに現状を維持しようとしていた。授業計画についても、初めのうちは論じられることがなかった。彼らはまったく一般的に、民法ならびに経済学を聴講するという希望を表明していた。私は選ぶべきシステムについて、まったく意識せず内的な明確さをもつこともないままに、正しい方法を見出したのだと思う。すなわち、法と権利に関する学問的な観念にとっての、とりわけ法的生活の領域における比較という精神労働にとっての理解力を学生たちに与えるための、正しい方法である。私たちはたとえばイエーリングの『日常生活の法律学』を用いて、日本の学生たちの日常生活を論じ合った。いかにして対立する関係が生じ、またいかにして日常生活から法的な関係(家主、年金受給者、本屋、鉄道馬車の車掌、劇場の会計係、鉄道の経営者との関連で)が生じるのかを論じ合ったのである。ドイツと日本で同一の法ないし正義の思考が生活を支配しているのを知って、学生たちは喜びかつ驚いた。

その際、格別の知的喜びとなったのは、我々の法の主要な源泉であるローマ法が、日本人にとっても、法的で明敏で論理的な思考へと教育するためのまったく驚異的な手段になりうることを確認したことであった。ローマ法といえば、私はその国際法的な精神を日本に来て初めて、正しく認識し感嘆しつつ学んだのではあるのだが。稲作農民と隣人との関係を規定する日本の慣習法は、地役権についての恰好の事例としてローマ法の教科書に載せられるかもしれない。日本人の稲作文化の全体は、相隣権の綿密な保持のもとでのみ成立可能である。段々畑での一様な施肥、共同の通行権、整然とした引水および排水など、すべては慣例どおりに暗黙のうちに法的確信や制度へと導かれた。あたかもそれらが、ローマの法典やプロイセンのラント法において、明確かつ厳密には規定されえないかのように。あらゆることに学生たちは協力した。彼らは日本の比較材料を持ち寄ることで、勇気づけられる印象をもたらしした。すなわ

ち、彼らはすすんで知識の確認に力を合わせたし、自分たちに降り注ぐ講壇学識の単なる意志薄弱な受け手にはならなかったのである。私たちがドイツの大学にいたころは、時にはきわめて有名な講壇学者からも、情け容赦なくお説経されたので、しばしば本当にうんざりしたものだ。重要ではあるが、我が国よりもっぱら外国で正当に知られたゼミナール方式の教育方法は、我々の時代にはもうほとんど採用されなかったし、私もようやく理論をつうじて学んだのではあるが、今や喜びをもって以下のことを観察することができる。すなわち、我々の大学の法学部においても勉学への活力ある導入が試みられ、ゼミナール式授業による訓練と深化とが前面に持ち出されていることを。

私たちは日本で、法学という、偉大ではあるが学生にとってはなお深く暗い領域において、たとえていえば投光器によって若干の点と分野を照らし出したのだが、このことはもっと深く立ち入る喜びと勇気をもたらした。最初に私たちは学習のシステムを構築した。今や学生たちにとっても、のみならず「独逸協会」(Deutscher Verein)の指導的な人々にとっても明らかになったのは、ドイツの法学および国家学の学習が成功するためには、より多くの人材の力を必要とするということであった。ともに司法官試補のエルンスト・デルブリュックとフェリックス・デルブリュックが、講師として法律学校に赴任してきたので、そこで私たちは教える領域を次のような仕方に分けた。すなわち、彼らは主として本来の法学を、私は憲法および行政法を、そして交代で経済学を引き受けることにしたのである。私たち3人はこうして良き同志として互いに協力し、今日にいたるまで交際をつづけてきた。エルンスト・デルブリュックは今や統計局長であるし、フェリックス・デルブリュックはゲッティンゲンの地方裁判所長である。

我々の学生たちは、もちろんいずれもが順調に出世した。しかも、彼らはもともと予定されていなかった地位には就かなかった。彼らが構成員となるべきであった最終審の混合法廷を創立しようという構想は、まもなく引っ込められてしまった。日本人は、欧米の文明諸国からの独立やこれらとの対等化という意識に性急に目覚めたのである。しかも中国との戦争や、のちのロシアとの戦争に勝利してからは、外国人の裁判官との協働に依拠した最終審裁判権という

構想は維持できなくなった。私が日本人たちのもとで働いていた当時からすでに明らかであったのだが、そうした要請は不当なものになってしまったと。講義のなかでは、私はこの目標についてけっして述べなかった。私は安心して日本の法廷での判決に任せていたし、しっかりと法と正義を勘定に入れるとともに、今日においても、ヨーロッパの文明諸国における裁判よりも、東京での裁判のほうを好ましく思っている。

我々の当時の学生たちは、今や、枢密院顧問官や知事といった高級官僚になっていたり、あるいは大学教授や有力な議員だったりする。彼らのうちの何人か、つまり大内〔丑之助〕⁽³⁷⁾、有松〔英義〕⁽³⁸⁾、岡本〔芳二郎〕⁽³⁹⁾、は、戦争前の何年か比較的長期にわたってドイツに滞在していた。前二者は、私がそのころ所属していたヴェストファーレンやシュレージエンの官庁に詳細な情報を求めに来ては、我々のもとで仕事を理解し精通していった。彼らは他の国出身のたいていの外国人よりも、ドイツのことをよく知っていた。これらの友人たちは、長い戦争にもかかわらず、また率直な音信が妨害されたにもかかわらず、ドイツのことを正当に理解して、敬慕の念を絶やすことがなかったのである。

将来構想（原書131～133頁）

とはいえ、友好的契機による日本の政策への影響については、勘定に入れるべきではない。日本人がイギリス人と共通するのは、彼らの国に有益な政策のみを追求し、国民的風潮、つまり社会的関連や精神的関連に動じないことである。同様に、平時には有力な組織や社会による念入りに考えられた調停も、イギリスとドイツとのあいだの戦争を阻止することはほとんどできなかった。戦争は、イギリスの政治家の考えによれば、イギリスの優越のために必要なので、個々の社会あるいはなんらかの社会によって念入りに考えられた強調や和解の試みも、日本固有の政策への効果を無効にしかねないのである。ここで肝心なのはもっぱら次のことである。すなわち、日本の政策をイギリスとの友好的関係から引き離し、ドイツを巻き込まない別の状況へと転換させること

が、日本の利益にかなない、まさにこの利益から要求されるのだということを、日本が見抜く時が果たして来るのだろうか。

このような時機は、私の確信によれば、来ることだろう。だが無理強いするわけにはいかない。日本の好意を得るためのあらゆる努力は、品位を落とすばかりでなく、効果もないであろう。日本人は、誰かが申し出たときには、いつも基本的には拒絶の態度をとる。関係を強いたとしても、日本はまったく変わることはないだろう。私たちはかつてイギリスの冷笑に関して信じられない間違いを犯して、日本に無礼なことをしてしまった。そうである以上、日本の友情を得るためには、私たちは二度と間違ってはならない。ここで重要なのは、ビスマルクの次の言葉を引用することであろう。「政治家は、人間業を介して神の足音の轟きを聞き取るまでは、ひたすら留まって待つことしかできない。そうしたら跳び出して神のマントの裾をつかむことができる。それがすべてだ」。⁽⁴⁰⁾

しかしながら、我々の側で日本を台風龍として、つまりヨーロッパ人が闘いに駆り出されるべき相手とみなすつもりはない。日本は中国への文化の伝達役となりうるし、日本の勢力がアジア大陸に伸長する結果になっても、これをジンギス汗の侵略行の再現とみる必要はない。とくにこの度の戦争とその戦禍を経験したあとでは、中国にせよチベットにせよ、イギリスの影響下に目覚めて諸国民の舞台に呼び出されることによって、ヨーロッパ文化にとって危険の少ない国家であるのに、日本指導の下でのアジア世界として意味づけるということなどを、誰が主張しようとするだろうか。相場師的政治家によって支配されている国民が、物質主義的な支配欲をキリスト教的外套の下に隠しているときは、いっそう危険である。平和にとつての最大の危険は、軍国主義ではなく、キリスト教的衣装の下で、金銭欲によって鼓舞され金貨や外貨によって支配された国政なのである。

私は日本で、4年の幸福な時を過ごした。本来は私は3年しか義務を負っていなかったのだが、当事者双方にとって1年間の延長が好都合であった。その後、私は帰郷を促された。長く滞在して、日本での興味深く快適で気ままな生活を故国での狭い関係より優先させた人々のうちに、私は属さなかった。私は

故郷への思慕が募ってきたが、それは母親に対するものだけでなく、ドイツの愛すべき土地、ポンメルンの湖とマルクの砂地の松への思慕でもあった。——もう一度フランクフルトのオーバーブリュッケを散策したり、暑い七月の日に熟したライ麦畑越しにカラシ葉がざわめくのを聞いたり、ウズラ狩のときに「さあ、ユーノー、さあ！」⁽⁴¹⁾と呼びかけたりしてみたい。孤独であったとき故郷を思い出させてくれた2冊の本に、私は感謝しなければならない。1冊は聖書であるが、私は母親と交わした約束に従って毎日聖書を読み、その中に母親の声を聞いた。もう1冊は、ロイターの『シュトロームティド』であった。その各頁から、つまりハーヴァーマン老人の検査室やパステルン夫人の庭から、ヨッヘン少年の王国やヒュンベルハーゲンでの農場暮らしから、ブラージヒの卑劣さと善良さやモーゼ老人の驚くべきユダヤ式道徳から、祖国の太陽が、世界の反対の果てにある私の書斎にまで光を射しかけてきた。

1889年の8月で、4年間が過ぎた。友人のヘーリンクやシュピンナーやクニッピンングとの別れは、私には本当に辛いものとなった。外国にいるときには、人は身を寄せ合うものだ。だがあとに残る人々にとって、両デルブリュックと私とを一緒にくたに見るのは容易ではなかった。というのも、祖国の一部が彼らから離れてしまって、彼らの帰国の時期はまだ来なかったからである。

日本からの出航(原書133～135頁)

北ドイツ・ロイド社の汽船「ヴェルダー將軍号」に横浜から乗船したのは、8月18日のことであった。中国とインドを経由して帰国するためである。両デルブリュックは別の帰路を行くことになり、アメリカ経由でドイツに向かった。北ドイツ・ロイド社は、当初の短期間は香港と横浜のあいだで船を運航させていたのだが、大きな東アジア航路と接続して、香港、シンガポール、セイロン、アデン、アレクサンドリア、ジェノバ、ブレーマーハーフェンを航行するようになった。「ヴェルダー將軍号」は小型の汽船だが、非常に耐航性があるとみなされていた。この汽船は、このことを第一日目から実証しないわけにかなかった。私たちは早くも9時には出航したのだが、すでに午後には激しい

台風に遭遇した。船は台風に逆らえるほど頑丈ではなかったので、これを回避するよう努めざるをえなかった。このことは、台風の中心が通常進む進路を外れさえすれば可能なのである。だが闘いは長引き、通常の航路から外れて海岸の近くに留まっているはずが、私たちははるか沖まで流されてしまった。こうして、標準的には27時間で十分のところ、一行程を上回る73時間の航海ののちに、私たちは神戸に到着して、ドイツ人たちから、とりわけ北ドイツ・ロイド社の代理人（アーレンズ商会のモシュレ*）から、たいそう嬉しそうに挨拶された。というのも、我々の長い未到着は、神戸にも襲来した暴風の激しさのゆえに、彼らを非常に心配させていたからである。

以前に訪れたことがあるので、私は神戸を知っていた。魅力的で清潔な港町である。ここから鉄道を使って1時間で、京都に行ける。京都は天皇の古都であるが、近代の始めに、天皇を修道院のような隠遁生活から引き出して、そこから東京へと移したのであった。京都は、姉妹都市の江戸とは異なって、新しい名前を受け入れることはなかった。江戸が東の都という意味の東京に改名したように、京都も西の都という意味の西京へと変わったのかもしれない。だが私は庶民がそのように呼ぶのを聞いたことはないし、公的な書類にそのように記されていたという記憶もない。

神戸に少し滞在したあと、長崎に向かった。絵のように並はずれて美しい、南日本の自由港である。それから私たちは香港を目指して進んだ。夜の10時ころ、後方に日本の最後の灯火が見えると船長が教えてくれた。私の日本での年月も、灯火と一緒に遠ざかっていった。4日後に私たちは香港に停泊し、翌晩には北ドイツ・ロイド社の汽船「プロイセン号」に乗ってシンガポールをめざして南下した。私たちはその日、途中で姉妹船の「バイエルン号」に出会う予定と聞いていた。同号は東アジアに向けて渡航中であつた。天候は晴れ渡って風いでいた。海面は滑らかで、遠くまで眺めることができた。午前5の時間、船の楽団がいつものように甲板で演奏を始めたまさにそのときに、船が視界に入ったこと、おそらく「バイエルン号」であることが知らされた。私たちは甲板上上がったが、まもなく船体の形や煙突に通じている人々がその船を識別した。挨拶用の船旗と信号が命じられ、皆が甲板に集まった。両船は航海の中間

点に到達して、向こうの顔が見分けられるほどに、互いにすぐそばをすれ違った。我々の傍らでは楽団が演奏し、「バイエルン号」の上ではドイツの歌曲が歌われて、ハンカチが振られた。誇らしい喜びによる名状しがたい感情が心を通り抜けて、図らずも目から溢れ出た。世界の果てで、ドイツの誇る2隻の汽船が交錯した。地球のすべての海洋でようやく尊敬されるようになり尊重されている船旗が、此方と彼方から挨拶を交わした。ドイツは、文化を輸出し、交易や通商での優位をめぐる諸国民間の平和な競争に耐えうる、諸国家の先鋒の一つとなった。——ああ、我々の栄光に満ちた祖国から、なんというものが生まれたことであろうか！

＊Mosle. 神戸の領事。

注

- (30) 脚気。「ベリ」はセイロン語で衰弱の意味。「ベリベリ」は著しい衰弱のこと。ベルツは脚気とベリベリを同定する論文を書いている。トク・ベルツ編『ベルツの日記』(上) 菅沼竜太郎訳、岩波文庫、1979年、13頁参照。
- (31) ミヒャエリスは第一次世界大戦中に食糧庁長官としてドイツの食糧危機に対処した。食糧問題への関心は、日本滞在時代に芽生えたということか。
- (32) 森有礼は、伊勢神宮の参拝の際に不敬を働いたとして、狂信的な天皇崇拝者たちに憎まれていた。
- (33) 長火鉢。
- (34) 銅壺。
- (35) 火事の被害を坦々と受け入れる日本人の姿勢について、同時期に東京にいたエルウィン・ベルツはこう記している。
「日本人とは驚嘆すべき国民である！ 今日午後、火災があってから36時間たつたたぬかに、はや現場では、せいぜい板小屋と称すべき程度のものではあるが、千戸以上の家屋が、まるで地から生えたように立ち並んでいる。」
『ベルツの日記』(上)、59頁。森まゆみ『明治東京畸人傳』新潮文庫、1999年、14頁参照。
- (36) 'Fujimi-cho' の誤りであろう。
- (37) 独逸学協会学校専修科第1回卒業生。関東都督府長官。

- (38) 専修科第1回卒業生。枢密顧問官。財団法人独逸学協会学校理事長。
- (39) 専修科第2回卒業生。法学博士。帝国大学農科大学および第一高等学校教授。特許弁護士。
- (40) 加藤千幸『危機管理の天才ビスマルク』ダイヤモンド社、1989年、14頁参照。ただし、出典は明示されていない。
- (41) ユーノー (Juno) は、ローマの女神。